

「たくさんのチューリップを咲かせたい」

富山県の花 チューリップの父



砺波市のキャラクター

みずの ぶんとそう
水野 豊造



農業だけで暮らせるように

水野豊造さんの生まれた砺波は、もとは庄川が流れていたところで、砂まじりのやせた土地でした。その上、冬になるとすつぽりと雪におおわれ、田や畑が使えなくなります。だから、農家の若者は遠くへ出稼ぎに行くのが当たり前でした。

しかし、豊造さんはあまり体が丈夫ではなかったので、出稼ぎには行かずに、小菊や牡丹の花づくりをしたり、にわとりを飼って卵を生ませたりして働きました。そんな豊造さんを、村の人々は冷たい目で見ていました。

「花づくりなんか、年よりのする仕事や。若いもんが、花なんかながめて……。」

しかし、豊造さんは、米のほかにも何かよい作物はないか、次々に試していたのです。

「出稼ぎに頼っているのは、いつまでたっても農家の

毎年、砺波市で開かれる「となみチューリップフェア」には、全国からたくさんの観光客が訪れます。

その“チューリップ王国”の土台を築いたのが、水野豊造さんですね。

富山県は“チューリップ王国”と言われ、チューリップは富山県のシンボルだよ。

このチューリップという花なら
冬の空いている田んぼで育てられるぞ！
出稼ぎが当たり前という
辛い農家の暮らしも
終わりにできるはずだ！



水野豊造さんのミニ年表

西暦	年齢	
1898年		東砺波郡庄下村矢木（現在の砺波市）に生まれる
1908年	10歳	家の仕事を手伝い、冬だけ学校に通う
1914年	16歳	体が弱かったため、家で花や野菜を育てる
1918年	20歳	初めてチューリップを植え、高値で売れる
1924年	26歳	庄下村球根組合をつくり、副組合長になる
1938年	40歳	初めてアメリカへチューリップの球根を3万球輸出する
1941年	43歳	チューリップの球根の輸出が突然止められる
～45年		戦争中、畑のすみにチューリップを植え、150品種を守る
1945年	47歳	富山県球根協会をつかって、再出発する
1952年	54歳	豊造が育てた新品種「天女の舞」が発表される
1962年	64歳	富山県花卉球根農業協同組合の組合長となる
1968年	69歳	亡くなる

チューリップに出会って
から49年間も、一つのこ
とに力を注いだのは、本
当にすごいね。



暮らしはよくなる。出稼ぎをしなくても、農業で暮らしていける方法がきつとあるはずだ。ぼくがその方法を見つけよう」

たった10球の球根から

「おつ、この花、チューリップというのか。ふーん球根で植える花だな。よし、10球ほど買って、植えてみるか！」

豊造さんは、カタログで球根を注文し、田んぼのすみっこを耕して球根を植えました。村の中には、「水野の息子のもの好きが、また始まったぞ！」

とうわさする人もいましたが、豊造さんのお父さんは、息子を信じて、黙って見ていました。

田んぼの雪が消え、タンポポの白いわた毛が風に飛び始めたころ、豊造さんのチューリップが、真っ赤なかわいらしい花をつけました。

「ああ、チューリップが咲いた。夢のようだ。お父、明日の朝市でこのチューリップを売ってくれや」

すると、どうでしょう。朝市では、チューリップの花がたいへん珍しがられ、チューリップ10本で50銭というびっくりする値段で売れたのです。それは、米1升（1.8ℓ）よりも高い値段でした。

喜んだ豊造さんは、毎年のように球根を買い入れ、チューリップを咲かせました。

思いがけない発見

「豊造！ えらいこつちや。花が、チューリップの花が、みーんな切り取られとる！」



チューリップ栽培をはじめたころの豊造さん一家（1923年ごろ）。右から3番目が豊造さん。

豊造さんは、くわをほうり出してチューリップ畑に走りまわりました。

チューリップ畑は、さんざんな目にあっていました。百本以上のチューリップの花が、全部切り取られていたのです。豊造さんはくやしがりりましたが、どうしようもありません。

ところが、この事件が思いがけない発見をもたらしました。球根を掘り出してみると、泥棒が折った花からは、他よりも大きな球根ができていたのです。

「そうか、花へまわるはずの養分が、球根に送られましたのだ！」

これがきつかけで、豊造さんはチューリップの切り花から球根に目を向けるようになりました。





一本一本のチューリップを熱心に見回る豊造さん。

「もし、球根栽培がうまくいけば、花を育てて売るよりも、もっとお金になる。これで冬、出稼ぎにいかなくても、農業だけで暮らせるようになるぞ！」
豊造さんは、夢中でチューリップを栽培しました。毎日毎日、チューリップ畑へ出かけて、研究しながら育てたのです。水の量はこれでいいのだろうか、肥料はいつごろやればいいのか…。
「稲刈りの終わった田に植えれば、来年の田植えまでには掘り取れる。米もチューリップも作れるぞ」
豊造さんは、村の人々に熱心に呼びかけ、大切な球根も分けてあげました。また、ひまさえあれば仲間間の畑をまわって、相談に乗りました。
「砺波のチューリップが、海をこえて外国へ渡ることになったぞ」
「外国の人にも喜ばれる花ができたんだ。みんな豊

造さんのおかげだ」
順調に伸びてゆくチューリップ栽培を、農家の人々は口ぐちに喜び合いました。

チューリップを守るぞ！

ところが、突然、チューリップの輸出が止められてしまいました。日本がアメリカ、イギリスなどと戦争を始めたからです。太平洋戦争の始まりです。「今どき、のんきに花をつくるのは日本人ではない非国民だ！ チューリップなど引きぬいてしまえ！」戦争が激しくなるにつれて、大切な球根は、牛や馬のえさになってどんどん消えていきました。「このままでは、チューリップ栽培が途絶えてしまう。どんなに苦しくても球根を植えつづけよう」
豊造さんはくじけそうになる仲間にも訴え続けました。そして、毎年、畑のすみこつそりとチューリップを植え、目立たないようにつぼみのうちに花をつむなどの苦勞をしながら、150品種を守り続けたのです。

花はみんなの宝物

戦争が終わると、豊造さんはさつそく球根生産の立て直しにかかりました。新しく富山県球根協会を作り、朝早くから夜遅くまで、自転車をこいで栽培の指導にまわりました。
「チューリップは魂でつくるのだ。心を込めれば、きつと人の心を打つ美しい花を咲かすことができる」
豊造さんと仲間の努力は実り、富山県のチューリ

豊造さんがつくった「天女の舞」。



砺波市内の小学生は、毎年チューリップが咲くころ、チューリップ公園などを訪れ、きれいに咲いた花を写生します。





チューリップの父と言われた水野豊造さんの胸像。豊造さんのひ孫にあたる水野舞花さんと泰雅君が案内してくれました。



チューリップの新品種の開発に夢を広げる、富山県農業技術センター野菜花き試験場の研究員。



2003年のチューリップフェアで発表された新品種「ありさ」(左)と「ウェディングベール」(下)。



ツブは、いよいよ見事に咲くようになりました。
 1951(昭和26)年には、日本で最初の花のお祭り「チューリップフェア」が開かれるほどになり、富山県は日本で一、二を競うチューリップの産地になったのです。
 そして翌年には、豊造さんが育て上げた新品種がついに誕生しました。花びらのへりがピンクで内側が白い「天女の舞」です。
 家族が集まってお祝いをした日、豊造さんは目を細くして、しみじみと言いました。
 「私は、昔から花が好きだった。だから、どんな苦労もできたんだ。花は、みんなの宝物だよ」
 今も、チューリップに彩られる砺波の春。豊造さんがチューリップにかけた心は、砺波の人々に受け継がれ、美しい花を咲かせているのです。



豊造さんの息子さんの水野嘉孝さんといっしょに、花卉球根農業協同組合を見学する砺波市立砺波東部小学校と庄南小学校の子どもたち。

富山県農業技術センター野菜花き試験場では、チューリップの新しい品種づくりに取り組んでいるんだよ。

豊造さんの家の近くに、「チューリップ四季彩館」が建てられ、今では1年中チューリップを見ることがができますね。

世界でまだ誰もつくったことのない青いチューリップをつくるのが、大きな目標だそうです。



富山の自然は、山や里ばかりではありません。日本海もまた、豊かな恵みを与えてくれる大きな財産です。次のページでは、富山湾の環境を守りながら漁する方法をみ出した酒井光雄さんについてのお話です。